



志行一己二編三

1冊5  
508  
18





508  
18



日本後紀乙酉七月讀之

吉見氏家藏書二十卷

是雖似全本猶有門文

永和七年十二月九日序按七端八九日類聚國史作十九日

續日本紀十永和八年十二月丙寅朔甲申脩日本後紀詠奏

御云拾芥抄二月九日蓋關十字欣

一卷桓武天皇

神祇伯者是天照大神神主也

延曆十一年十一月

十一月辛巳勅明經之徒不可相日吳音念声誦讀致

訛謬熟日漢音



十四年四月、勅云禁凡下百姓將田宅園地賣買與  
等受云云

五月右京人上元野兒國女流土佐國（自稱諸天妖言惑衆）

二卷十五年三月、勅禁祭北辰（北辰）

三卷十六年七月、勅男女有別至行會集混淆在別宜

加禁制

十七年神宮司（補任限以六年相替）

七月、坂上大宿祢田村磨劍建清水寺

九月、宮内府應正僧（子假陰出身）

十月、官符禁制西京畿内夜祭歌舞

四卷十八年二月乙亥朔乙未贈正三位行民部卿兼造官

大文美作備前國造和氣朝臣清磨（薨本姓般梨別）

公後改藤野（云云）大學南邊以私宅置弘文院（云云）

五月遣渤海使外從五位下内藏宿祢賀茂磨

等言飯御之日海中夜暗不識所著于時遠有



火光尋逐其光忽到鳴濱訪之是隱岐國智支郡  
其處有人或比奈麻治比賣神常有其驗高賣之  
輦漂宿海中如揚火光賴之得全者不可勝數神之  
祐助良可嘉報供以奉願幣例許之云云  
九月禁京畿百姓奉北辰燈  
十九年二月禁斷民蓄錢貨以求壽位  
四月勅象牙陰陽之外親王以下不得服用  
二十年四月令越前國司斷屠牛祭神

五月定准犯科被

大被 上被 中被 下被 等云云其毆傷若重者被  
之外依法科罪

五卷二十一年五月唐相摸因足柄路開營荷途以

富士燒碎石塞道也

二十二年四月造宮大土物部建磨等云云

六卷二十四年七月勅疫病之時民庶相悼不通水火存心  
救療何有死之父子至親畏忌無近隣呈疎強更



復何言已者衆多存於此宣喻所司務不制自若  
不遵改隨即科處云云  
九月丁卯勅於清瀧宮高雄道場起都會大壇  
受灌頂三摩耶是本朝密灌之始也

十二月勅賜坂上田村麿清水寺依先是禁私寺也  
二十五年二月官符應五歲七道諸國轉讀金剛般若  
經云宣使國令僧春秋二中月別七日存心奉讀  
之云是為宗道天皇也

七卷平城天皇延曆二十五年

四月平安宮 五月云辛巳即位於大極殿改元  
大同開禮也國君即位踰年而後改元者緣臣子  
之心不忍一年而有二君也 九月壬子遣使封右  
京及山崎津雜波津酒家瘡以水早成粟穀米  
騰糶也 大同二年四月罷參議号置觀察使近衛府  
者為左近衛中衛府者為右近衛府  
左右大將始也注

藤原内麿左近大將  
坂上田村麿右近大將



九月壬子禁新西京巫覡事右被左大臣宣作奉勅  
巫覡之徒好說禍福廣民之愚仰信妖言淫祀斯  
般系歐咒且多積習成俗虧損淳風云云

十月丙辰勅令三位以上並着淺紫

按續日本紀二文武天皇大寶元年三月限制一位者

皆黑紫二位以下三位以上者皆赤紫云云

八卷三年九月詔曰官多別政躡人少別事執首云云

九卷嵯峨天皇大同四年

五月癸酉聽五位以上通用白木笏

十卷弘仁二年九月奉幣帛於八幡太神宮櫻日廟此先多禰也  
天祥亦延曆以後

十卷弘仁二年九月禁祭北辰二年三月禁男入尼寺

女起僧寺九月勅恠異之事聖人不語妖言之罪

法制非輕而諸國信民狂言或言及國家或立陳福

福敗法亂紀莫是於斯道仰諸國令加檢察自今

以後若有百姓輒稱託宣者不論男女隨事科決

十一卷弘仁四年此歲天下異竹實如麥其後枯



五年閏七月御暖帳院

十二卷六年四月辛酉近江國滋賀韓崎<sub>ヨキヤマ</sub>過崇福寺<sub>トモフクジ</sub>云

大僧都永忠<sub>トシタカ</sub>自煎茶奉御<sub>テマケ</sub>云

六月城國乙訓物集<sub>モノヅミ</sub>國背<sub>クニサガ</sub>世云

七年二月丁酉朝有蝕之丁未日有蝕之云

按丁未十日也日食何有乎是誤記乎

十三卷八年四月於大字寮使習漢語

九年四月有制改殿閣及諸向之号皆額題之

十二月辛巳朔詔曰云改錢文曰富壽神宝

十四卷十一年

二月詔曰云其服大小神事及季冬奉幣諸凌則

用帛衣元正受朝則用袞冕十二章朔日受朝

聽政受蕃國使表幣及大小諸會則用莫攄袞衣

皇后以帛衣為助祭之服以摺衣為元正受朝之服

以鈿釵礼衣為大小諸會之服皇太子從祀及元正

朝賀可袞冕九章朔望入朝元正受群官若群



臣之賀及大小諸會可服黃丹衣云云

丁丑卷十二年

四月官符禁斫損水辺山林事云大河之源其山樹  
然小川之流其岳童焉爰知流之細大隨山而生丈山出  
雲雨河潤九里山童毛冬谿流洞乾云百姓悼遠  
貪近川上林任意似採至有旱年溉之苗焦動連  
損害賊此之由也云云 禁斫損路邊樹木事云道邊  
之木夏垂蔭為休息處秋結實民得食云云

八月伊勢大神宮云云此大神者天下貴社云云

十三年

三月秋實云云運賃云云

六月庚辰百尾張國熱田神奉授從四位下

十四年三月割越前國江沼加賀二郡為加賀國

十六卷 弘化十四年

淳和天皇

五月有詔云云臣講 平城太 云一國之內有兩太皇瀛  
上天皇



表裏中未詳前聞云請除太上天皇号并撤服  
御物云和此書首尾称臣此表躰也不可敢用宣  
附使奉返云云

十二月求不諱之直言

天長元年三月乙亥日沙門守敬空海奉詔修  
請兩經法于神泉苑八月官府應令諸國郡  
司譜圖謀一紀一進云粉石寶錄不致假濫云  
同日丙申官符一擇良吏一遣巡察使一順時令一奉

賢避邪一擇固守一令諸氏子孫咸讀經史云

參議從三位多治比真人今磨奏出備編言守古曲一歷  
賢前王分於求賢送於經國伏望諸氏子孫咸下本  
字寮令習讀經史學業足用量才授職者宜五位  
以上子孫年二十已下者咸下大學寮云云

十七卷二年正月加賀國云改為上國一十二月云今歲  
浦嶋子飯御雄畧天皇御宇入海至今三百四十八年  
也云云



二年九月庚午官位親王任因守云云為勅任另稱太  
守以一代不可承例云云

十八卷四年五月空海請佛舍利內哀礼并灌浴云云

五年

十九卷六年

三月己巳时大和國高市郡賀美鄉取南備山飛鳥  
社迁同郡同御鳥形山依神託宣也

七年

二十卷八年今年奉勅滋野朝臣貞王子諸儒撰集古  
今文書以類相從凡有二十卷名秘府畧

九年己亥尾張國海部郡人山口忌寸目不自賣紛正

稅稻三百束產三男也

十年二月皇帝迁御西院乙酉皇帝於淳和院讓

位于皇太子

謹讀後紀抄其三四以備遺忘平城堰城二帝是以

具迁御之地名淳和為離宮其非謚例

具迁御之地名淳和為離宮其非謚例



又按禁北辰後世更興之謠祀是矣妙見祭是也又知大神

名比奈麻治媛命也未普知是紀始見乎又春秋二仲

一七日佛事蓋和俗彼岸會權與彼讀金剛般若波

羅密多按波羅密到彼岸則彼岸會名依般若

經而起乎然延曆二十五年春分也中日彼岸會始也

又按自續日本紀至後紀諸國疫死多或賜醫藥或

祈諸社或轉般若事詳載之而元牛頭天王脩法

之事然牛頭天王祠後世所建而依延長風土記

為素戔嗚尊欽我國疫神名見祝詞式所謂

八衢夜神八衢媛神久那才神九三神也牛頭

天王者見佛經其脩法有天刑星儀軌原款氏所

行也然傳教弘法之時未行之欽正史實錄元其

據見

○尾張津嶋牛頭天王祠 社傳欽明天皇元年鎮座

不見日本紀又牛頭天王名此時未有欽

改曆雜事記聖武天皇天平五年吉備飯朝於播州逢



牛頭天王廣安年社記及宰相記說同之按續日本紀十吉  
備飯朝天平七年乙亥四月也紀未謂牛頭天王之事  
津嶋社記嗟成帝再建云

日本後紀類聚國史等無建牛頭天王祠事當時  
天下疲多然亦無祭牛頭天王說

清和帝貞觀十一年以津嶋天王勸請山城國祇園社云  
三代實錄無此說二十二社註式及改曆雜事記宰相  
相記廣安年古證文皆以播州節磨郡廣安年牛頭天

王為京師祇園本祠

凡國史無牛頭天王之事然則中世以後所祭牧東鑑  
見尾州津嶋社名

禪宗淨土宗ハ僧綱と賜りり只衣と許りり  
其川臨海流ハ五山及妙心又酒ちもの位職のまひて  
紫衣と賜り故弟内も五にその位と稱しりり  
曹洞流ハ越前の永平の龍光の惣持に入院の儀とあり  
傳奏にありて論旨とす弟内しては只傳奏の人に



あひて吾と勝むりき浄土宗ハソグくはてしちの後任  
の名と御り本寺に造りて給旨と有りし内ハ  
明きなり禪にハ和尙とのあて名浄土にハ上人との宛名之  
浄土宗給旨

着香衣令参内宣奉祈宝祚延長者依テ

天氣執達此件

弁某

年号月日

何回其上人

西山流に御房とあり鎮西流にあり

又女房と書あり

某回某寺の住持某の如き勅禱にてせざれば  
とて合香合まらばゆきと申すこのより出  
るはほそくれと

表をに某の大綱云々

中綱云々字相も  
時に有り

年号月日あり

禪宗の編旨にありし物ども金とかりて衣と求め  
ゆきと事なり近世知恩院に信託もあつて院家ハ  
信託に補せられゆき又某回坊上も貞誓大信正にあり



て後を承りしに、中江又信に今もせられし、禪宗に、  
あつたものなり。

元龜二年九月十一日平信長屬延曆寺桓武勅額 傳教開基

天正十年六月九日菅原利家屬能別能仁山 天智勅額 春澄開基

天正十二年三月廿日豊臣秀吉屬紀別根來寺

天正十五年四月豊前國彦山伏豊臣家之命

按ずれば浮屠氏中世國王の尊崇に依りて驕奢自恣  
即ち其の利を利器と備へ武備と事し、國郡

田園と押領して國家の害と為事諸別多かりし  
某の山に修造武備堅固にして、後人降す處に、  
あり某の寺に法成嚴重にして、凡人のどうも不能  
有り某の嶽に、磨石にして、さる者、必天狗と爲す  
を、某の山に、一國主不入の地、今、職、  
集の堂と立我意と據いて、貪欲と爲す、  
とや、某の將の、これ等の邪徒と爲り、  
ひ、さる、と、修、法、師、も、武、事、と、  
出、て、佛、事、と、あ、す



ゆれも今にあらうて猶魔所等の妄言と仰て一山と  
因す謀とあすふ多し又徳社の神人と申せじが穢とす  
ま武と専てすしつ傍家につぐ宗懐徳田等の二宮の  
ごしつれが彼翁一時の富貴と念ふ却て横死はなび  
し神徳ともしつらぬうぬうぬ此は徳田の自願借  
のあまう國主不入れを保つとるや人望もあつても  
赤い板公舎に依りて出せしとらにこそ礼儀祝  
佛社と假て己と利し驕尤も孫もんと欲して

國主不入の事と自由す今法別なく國主令えず  
そ國東の御下名と受り寺社とんらに多しを學ぶ様  
あゝあゝ動とれが訟と發して自を鳩にあらされ  
あゝあゝと遊ひあはれてその俗又美百なる今の俗祝  
あゝあゝ一封の地と治りあゝあゝ非通人と害し身と  
喪ふが者あゝあゝ吏と兵とて城に國主不入の  
あゝあゝあゝ至愚の愚しつらぬうぬ



*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

。武田信玄諸品の城主、之為と我か士將等に志らうしめてい  
そくにアらずにあらうに其中にを列乾の城主と是等は  
霜月十日あまうにまつる天斗多うりの桃實と三つ岐阜に  
ゆぎ一に祝してまうし一の一の城々のまししせれ  
物の一つハ濱松一贈とせれよ神君賜と希一て後を桃  
とい隠して捨一めれしあらうに信玄大に感づりと  
甲陽軍監に志らせり神君は時三十年に  
今川の赤葉ををに急病に用てまり一あら葉あらう是をハ







改關東制法將<sub>レ</sub>新田氏族<sub>レ</sub>之源有親父子潛出德川<sub>レ</sub>御義季<sub>レ</sub>集<sub>レ</sub>逃作時衆<sub>レ</sub>持氏始應永二十三年十月伊豆國坂落其後飯鐘倉然為義教云夫

一說曰德川下野守滿義屬新田義貞而勃王新田氏不得其志而已矣自此德川家通志於吉野右京亮有親滿義嫡孫修理進親季子也

奉遠別井伊谷宮之令子子足利之兵戰處々於信州並合王家敗之有親及令子三河守親氏被執而入京師時有遊行他河上人在洛乞其命為時衆所謂長河德

阿是也長河示寂之後德河入參別坂井村<sub>今作酒井</sub>移居松平御稱松平太郎左衛門親氏武畧聞近境土庶奉為主云

至今<sub>レ</sub>崇敬遊行上人者謝先祖往日之恩也云

三說似而不同未說蓋有故者歟夫親氏主興起也似羽大祖其世<sub>世所謂至譜以親氏恭親信光為三代然恭親者親氏今第先代信光下令後讓家故有八世九世之異</sub>

神君御天下克化被宇內嗚呼其神其武乃歲之供是歟奉書<sub>レ</sub>禿筆亦實雖有其恐而為遺忘私記此

有親主親氏主入三州之年我敬公所还不相國年譜序



為<sup>レ</sup>永亨元年己酉

天文十一年壬寅十二月二十六日 神君降証

或傳云生<sup>レ</sup>天野清右衛門某之家其妻初奉御乳味云

自<sup>レ</sup>天野孫郎景儀仕<sup>ニ</sup>親良主而以來子孫代奉仕<sup>ス</sup>

徳川家嗚呼不<sup>レ</sup>一朝一夕之公思<sup>ニ</sup>氏族亘<sup>ク</sup>殺<sup>レ</sup>身而足<sup>ス</sup>忠者也

口参列振投山神宮寺徳川家御位牌ノ中

親氏公

康安元年辛巳四月二十日卒去トアリ

恭親公

永和三年丁巳九月二十日卒去トアリ

石年号可<sup>レ</sup>疑<sup>ク</sup>康安元年ハ尊氏薨後四年<sup>ニ</sup>永和亦義満

代也然<sup>レ</sup>有<sup>ル</sup>本<sup>レ</sup>據<sup>ク</sup> 康正二年四月廿日卒恭親王ハ某年

信光公

長亨二年七月二十七日卒去也

信光ハ恭親ノ御子トアレ<sup>ル</sup>實ハ親氏ノ男也

康安元年ヨリ長亨二年マデ百二十八年也御父御







衣版着てさうの美事者と云ふ人の中ゆきは未になり  
たり家人の廢賤南蠻流せし一也實に智も徳も  
もさうさう位に飛り衣と鳴り人にかゝるゆん  
夷杖の云為也近世徳宗の傍金とあり紫衣香衣と  
買人にさう物一ゆり  
おろす祿と祿一俸と云ふ南蠻乞士の者みひと  
すりすふれ

○伝云、漢臣惣騎馬數通計九千三百四十騎、又

是、老臣より以下、小身にあり且醫師、同明、振樂、まで  
い、四に撮する、然れに足輕六千三百七十三人と、とり  
人數一万五千七百十三人、計もありと、二言にも不及、がして  
馬にも、亦人ともつり、身もつりて多かり、さうもなれたる  
今軍法者流、これと、さうもきるものなり、に説あり  
彼、孫子、さうさう、六王師、六軍に、法候の軍と、今、せ、天下に  
列して、説と、さう、其、量、大に、異なり、甲別、ハ、序、田、合  
み、て、殊に、法、方、敵、多、切、の、由、り、も、さう、さう、何、れ、が



國の成敗とらざるは思人あらずも信まかあり者  
るんが強弱是れと見え人とほりつと得た老はよき  
者なりしはさる坂がゆるぎもさる半なりしきも  
有るし今のそと驕るもゆるぎのあつらへし  
物も敵國外患う軍事に習ひしは後法  
と知るるもあつらへし皆甲列のこころ教は軍  
法者しと解るしはさるゆるぎもゆるぎのあつらへし  
うく文音のまに和記とゆるぎて自由顔ありれし

若う坂として秀吉の臣うしは言如何にうら  
わん一軍十さり人嗚呼

本願 大工兵衛入道う聴

前越品大守龐岩大印宗輔居士  
持是院從三品法印権大僧都大羊椿公

妙純

妙全

紹興



右濃別治陽禪寺の位牌に有り是ハ皆亦後代  
より〜子但道三竟真等にあ〜を時代抄前々  
しや

。杉島御書

杉島〜ま〜れ竹〜羽衣の約書とれ〜村〜に〜  
神宮月〜ら物〜の事〜ら〜く御書成〜  
〜より〜と〜の〜中〜に留士〜と〜ら〜く〜ぬ〜あ〜  
〜ら〜く〜れ〜を〜

浮島が系よは〜ら〜御書や〜尾元が〜の〜  
禁裏新造 御遷幸之時う〜く〜や〜

。ゆら〜河〜の〜あ〜ら〜の〜  
い〜首ハ

源光友卿御歌也

。安納大藏少輔元真法名 海本と安納姓〜と〜非也〜詠詠

刑部大輔源信真の子〜駿別安納谷に移り住也〜

後安納と以稱号とせ〜ら〜系小〜

。源家の系譜と〜に右中将兼武藏守源忠政可成の五男

の子信俊忠廣母名古屋山三妹〜山三サカキヤマ尾州右後

各古屋別居人高信が子也



の人なり

前田利家

後二位権  
大臣言

の父ハ尾列愛智郡一柳庄荒子村の人

源氏といひ一系弟に前田藏人菅系利昌と記す

前権中納言源家久

鴻津

右大将頼朝の子鴻津豊後守忠久

十三世終理大夫義久の子也

吉田宰相源輝政

池田三

の祖父池田紀保与恒則始万松院義晴

將軍に仕へし將軍江別宮太の山中に薨り後藤賢

とて宗傳と法名し尾列に移り住せり

源氏ハ嵯峨源氏左大臣融の曾孫登田宛の子源田綱と

始り

一説に綱ハ仁明天皇の弟三皇子石大臣亮の三男比加の

源賢の子源三敦が子綱といふ

尾府下奉仕の源田家ハ綱が子源次久十三世右馬允満綱鹿

苑院大相国に仕へて武者所とせり其玄孫源次道綱参

別額田郡浦田村に移り住せり其子源太盛の範綱

長親主信忠主に奉仕し享禄二年五月廿八日に卒す



是より以て 延川家にほふまかり

。對列の宗氏に権中納言平知盛の子石馬助雅宗と宗と称

号す

。小守官兵衛孝高ハ黒田長濃与源誠隆の子也誠隆播磨赤松

の族也藤齋故識が養子とありしを孝高の孫と依

忠之に松平の称と賜りたり

。鰯 ササガ 以監米醸魚為酒熟而食之 俗作鰯非也

。字書に「所と考れば我國の「」に近き也

魚 鱸物 魚魚 音魚ニ 魚也 魚魚 音光新 魚也

。清人種々の繪と彩板して渡す、れりらう、小兒輩れ

りてあまびにすも所の物も我國依給さうの類も

うももつれハ文雅少て、るに足れり、コトゴト生財三百六

十行の圖と得ゆる、らうの市町とこに足らん地

招牌ハ倭にり着板うち院の牌勝と一般に足る實活

の、由遊人乃清倭漢かりり、り、り

。木犀の詩朱子文集九にあり、コト好で、日本と、コト樹の故抄して、死す







關及尾張守等始備は其負帥ハ人大哉及尾張守二人  
三關二人其考選事力及公辭曰並准史生云梅子らに  
大寧府ハ西鎮三關ハ帝京の近き衛守尾張回ハ路四方に  
通じて殊に非常と禁ぶ此方故かく令がたふ事の色  
も亦くどゆりえ

。勝宝感神聖武皇帝  
天平應真仁正皇太后 光明皇后也

宝字称徳孝謙皇帝  
日本尊号是始也

。續日本紀一文武天皇即位二年十月乙卯遷多氣太神  
宮于度合郡

是齋文大神文司をどりしに也  
。延喜太神宮式伊佐奈岐宮月讀宮矣録神名而瀧原  
及兼伊雜三宮不録其神号但記太神遙宮而已其為連  
秋津之西神伊佐波止美玉柱屋二命則何不書其号乎  
若風宮者延喜以後所建強所提社在是号又度會宮



別宮上宮者原大宮地神靈也見儀式帳其為大手上御祖  
宇賀御魂三神者蓋後配享於祢宜所附會狀或  
二座或三座丈亦不一次大神宮攝社二十四處之内大土  
御祖社三座國津祖社二座度會宮攝社十六處之内  
度會國津御神社一座是皆本居初任之人而直不  
土靈祠歟

是等も亦書して以神文に返り其説と可聞也

。慶長十二年三月九日天野高直御康景駿州奥園寺

城ヲ出奔ス先此康景城館脩補ノ料ニ未地ノ竹ノ伐シメ  
積貯ヘ足輕救葦ヲシテコレヲ監セシムル所ニ御領田原ノ  
御民夜ヲ侵シテ彼竹ヲ斫シ盜取ノ間番ノ足輕其盗人  
ヲ追ヒ張本某ヲ捕テ殺害ス殘黨適チ生ル者代官井  
手是助某ニ訊フ井手便外シ康景が家ニ遣シ諭シテ曰  
御領ノ民無罪ニメ死ニソクト聞タトヒ罪アラバ何ソ吏ニ告ガ  
彼民ヲ殺ス足輕ヲ誅シテ罪ヲ贖ベシト康景曰盜賊令  
ヲ犯シテ我領ニ入丈夫ノ物ヲ攘擾スル者ハ必以テ殺ス是當



時ノ定法歟輕卒私意ヲ以テ人ヲ殺ニ非ズ予令シテ過  
人ヲ殺サシム彼何ノ罪アリテ誅セシ若過ノ名アラバ我其  
討シ得ベシト井午モウリ國康景が武功ヲ忌ム故上聞シテ百康  
景武勇ニ驕リ家人ヲシテ御領ノ民ヲ殺ヌ全過人ニ非ト  
讒訴ス公甚憤給フ然仰ニ曰康景ニ於テ平介ヲ所  
為有ルバカラスト雖吏認シテ所默スバカラス他日ユレシ紀明  
シテ其實不吾リ定ムベシト本多上野女正純康景ト好故  
余ノ重ヲ告テ曰足下無過トイハレ上ニ對シテ決斷ニ及バシ

事其恐レナキニアラズ曲テ彼輕卒等ヲ斬テ御憤ヲ休能ラ  
過ヲ謝シ奉ルベシト云康景曰直ヲ以テ曲テ上ニ從フ勇カエソ  
恥ル所且下賤トイフに豈元吉幸ヲ殺サシヤ不如身ヲ退シハ  
ト其夜衣ヲ拂テ城ヲ出テ相列將野ニ隱ル云慶長野聞  
。土岐頼藝濃州にあり河西の系池賣某徳之勢  
故時濃列おま性す土岐の家老長并辰辰某に親あそ  
どうして家人のあそり元吉恐ろしと老を種々の謀  
とぬ遂に辰辰と弑し其地と領すこれより之系



より又あり女と招て頼隆にはく〜めりれが長井と殺せ  
とも罷せざり〜も其後主君頼隆とも返て全しは而  
以有〜り殺るべし〜女と以て己が妻と〜自籍發  
とて汝を道と名余ら彼婦頼隆の子と〜とて道に  
家よりして産まこれと義龍といひ〜後に道にが實子  
二人と〜いひ道に女房と名〜〜と〜義龍と懸〜  
〜〜す或人義龍に告て曰道に實父にありす吾子  
ハ土佐の子なり道に頼隆と返て殺〜〜吾子の為には

父の〜〜と知〜〜子義龍〜〜より元斬也  
義房を〜〜〜の恨〜〜と殺〜  
道三とも攻て殺〜〜其後〜の〜に濃列とありて  
我成と振ひ〜〜子龍貞ハ稲葉の城と兼つ〜  
〜〜人整〜〜の〜〜西三カの人  
衆〜〜氏家稲葉伊賀〜〜皆龍貞  
殺て御田家以属〜〜永禄七年八月信長龍貞  
稲葉の城と攻圍〜〜〜







○或人の評に身栴、回貫自年々、のち日印紀ありと云  
詣て足ゆりし二十卷あり、十女老ハ身栴家十女老ハ  
藤波家の正字のし、證亦もたし、たけり實年、  
初年、うすくゆり、何、往古のち、日印紀と云  
おに、あ、て、舎人親王御撰の本と云、り、  
書、ら、り、の、し、ら、部、の、訓、点、と、云、ゆ、り、ゆ、り、  
家にも古書、絶、り、た、れ、ゆ、り、ゆ、り、

○位吉諸神事次才曰六月晦日荒和御祓早日御供備

進於住江殿スミノエ兩官東帯氏人布衣着之己刻先氏人総

官在廳カキ神官等於下ミコトド客殿邊着座各有坐次權少祝

酒當々前レ坏入レ之後祝言祢旦申之次酒一献後賦管取

割天次才返次立座列立下客殿東年氷進之自惣官

冠木綿氏人次參御前云於用口御宿院頓宮兩方

假屋賦管陪膳後面々取之取割天返云

○万葉才三丹生王歌曰木綿年次可比奈尔懸而天有左佐

羅能小跡之七相管年取持而久堅乃天川原尔出立



而潔身而麻之乎 百葉、月十六神樂、良能、小野、今案、任吉アリ

同牙六十鳥鳴其佐保川丹石ニ生管恨取而之努布草解

除而益乎注水丹潔而益乎

○無題詩集一六月板 法性寺、入道、啟下 世上為流例熊林鐘晦日

楔除象諫在他諫千年頌期有定期六月風苔地燎迷

迎夜処右端氷冷欲秋中未知何物号管板結草如輪令

首蒙

○倭姬命世記 乙 若子命以麻神 苜蓿、靈等進 倭姬命而令

祓解 ハトアリ

○天津祝詞 喜撰式 天ヲバナカト云ト云此心ニテ心得ベシ

○周列氷上山ノ傳記 同ヨリ附會多し其、中ヲ枚ス彼ニ曰

天已ニ開ケテ圖カナル物現ズ其、中三魚ノ神 坐マス 國常立

此神昂天ノ主ニシテ太乙ト称ス 天、御中、主、北辰、尊星 此、一、点、五、星、ト

化ス 五行ノ神 又七星ヲ生ス 五行ヨリ、天神七代ヲ生ス

○梅ニ是道家ノ説ヲ我國ノ神名ニ習合セル説也 周防國

都濃郡鷲頭山星宮後同國氷上山ニ移ニ妙見星堂



ト号ス是本百濟、琳聖來朝ニテ祭リ初シト云

○長列大内氏ハ北辰尊皇供シ家に傳ク子別河野氏ハ

八丈龍神供ト備セリ當内家トシテ海祀多ク

○勢別國司北畠ノ居城初志郡多氣元其後多氣郡

田丸御所飯高郡大河内御所同郡坂内御所トシテ將に

命じて監セリ是と國司の三大將ト云ハ一又其後

一志郡波瀨御所同郡岩内御所藤方御所トシテ公宮と

云テ之家ト稱セリ右これと護れり

○小野道風ハ敏達帝の七世参議兼守北孫父大貳葛絃

麒麟抄に尾張の國の人多由信らに春日井郡松河村

の村民傳云松河乃里ハ道風の生れ地なりト云ク

○天正十八年八月初日大神志年、武列豐滿

郡守城信にこれと國本

又、信の城ハ文正年中上校右京亮憲忠の在居大

田持資入道道灌築初らり天正のころいさ山

石為城京政居城なり一京政北條氏に属して



相列々四系に在り、其、丹川村、其、初、工、物、と、して、  
と、す、り、せ、り、に、後、改、増、を、山、丹、は、等、及び、真、田、隈、成、寺  
お、入、志、と、神、君、お、通、り、と、に、攻、て、移、り、か、ら、せ、た、ま、ひ  
々、り、慶、長、十、二、年、朝、よ、ち、城、と、築、殿、園、と、作、り、せ、は、ま、ひ  
と、が、實、一、万、世、の、法、基、よ、り、ゆ、り

○天正三年正月十七日の夜、天竺康景が、妻、目、出、成、受、相、の  
歌、と、ろ、ろ、と、そ、の、十八日の朝、<sup>アキタ</sup>朝、<sup>コト</sup>歌、と、ろ、ろ、と、<sup>コト</sup>朝、<sup>コト</sup>歌、の、<sup>コト</sup>朝、<sup>コト</sup>歌、  
乃、時、連、歌、一、け、り、者、と、も、と、な、り、一、折、作、り、し、れ、し、れ

う、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、ろ、ろ、の、歌、と、ろ、ろ、と、所、連、歌、あり

彼、受、相、の、歌、ハ、登、ろ、ろ、邪、れ、氣、ハ、歌、ろ、ろ、と、ろ、ろ、の、歌、

世、と、ハ、登、り、ろ、ろ、と、ろ、ろ、但、之、別、録、に、ハ、歌、ハ、慶、長、三、年、正、月

二、日、の、夜、<sup>コト</sup>登、り、ろ、ろ、と、ろ、ろ、是、は、法、法、の、某、が、妻、受、成、り、所、と、り

そ、れ、に、ハ、朝、の、歌、を、と、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、ろ、ろ、康、景、が、妻、ハ

ね、の、歌、と、夢、お、あり、し、と、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、

ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、  
擲、て、八、幡、山、の、御、陣、營、に、擲、す、以、應、賞、と、り、と、黄、令、十、牧

○ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、  
擲、て、八、幡、山、の、御、陣、營、に、擲、す、以、應、賞、と、り、と、黄、令、十、牧



とれらるゝるこゝも新羅國まで武威と振ひし西  
傍法師に捕へしこゝもあつゆ一これ西契利斯  
當れ邪宗にあられ身に疵はくすとあき一放り  
一旦武勇はらうも道と知らばつらう多し  
石田治政大浦日蓮堂小西栲はちハ耶模の徒多し  
君臣上下の道と知らず各教の罪人天下の惡賊なり  
慶長九年二月日 台榎大相國東海道越後道奥羽  
路等に命じて去一里ごとくにあつて樹と

極めたる日年五月下旬にありく加納せし今に  
あてり人里程と辨し皆 云の賜也

日一ヶ月江戸場上り信譽四師号賜り高師清  
淨華院惠照四師の例なりと

日ト十九年大坂の役奮りて元和元年五月終り  
味方の獲し賊首一万五千三十餘級と云伊東右馬允  
東田長房是と監せしとあり

後花園院御宇神皇南方より涉由産れり去りし月



記に及久保康正二年十二月間偽辰太郎上月丸近將監中  
村陣忠為二十人吉野に入明年長禄元年十二月二日に偽王  
と殺して 神室とありまうほど二年八月晦日 神室  
御由路のうら久保久保記をにまらるる書りし將軍家  
傳及び續大平記と出せしし時記と足らぬ也

或人曰當時卓騎孤身にして剣と握鎗と揮り武勇と  
働—のと武勇者よといふ或人老一せに大身にありハ  
まらるる其故ハ強氣にして人に随がずこととてんとれ—

或人の功名も能の物う—まど人情にうとら故人の譽するう  
孤獨の働むうういれにもしお身にて竹波流と興—  
回と持文下と誤り人とるに自らあ—て人と殺—功と  
まて人とあす心うらみ隨従の人とあひとほりて城と攻  
又人と得てハ落下に助けあど—故に攻身に人殺多し水屋  
しうて自らとまら—ハ勇た勇見ごいふに非ず童子の  
教とく理會すべしとまら



